

「全体共通」問題

問題1. ITコーディネータのデジタル経営支援者としての役割で最も適切な説明は次のどれか

〈解答群〉

- ア. ITコーディネータはコンサルタントであるからデジタル経営成長サイクル(C1)のプロセスを中心に成果物を作成し、価値実現サイクル(C2)の作業はITベンダーに作業を引き継ぐことになる。
- イ. ITコーディネータは外部の専門家としてデジタル経営支援者に招かれ、デジタル経営推進者等の役割をただ代行するのではなく、助言や支援を行い、最終的には社内人材が役割を担えるように育成していく。
- ウ. ITコーディネータはデジタル化に対するコーチであるから、デジタル経営プロセスのすべてのプロセスに対するプロジェクトのステイクホルダーを育成し、デジタル経営を推進することが求められる
- エ. ITコーディネータはデジタル経営のプロジェクトを押し進めるために高度な能力を有するプロジェクトリーダーであるから、プロジェクトのPDCAを効果的に実践する能力が求められることになる

問題2. ITコーディネータ(ITC)に求められる実践力として不適切な説明は次のどれか

〈解答群〉

- ア. ITCの有すべき実践知は、「専門知」、「行動知」、「意識知」で構成され、実践力の基本となる
- イ. 「実践力」とはIT経営を実現する人の意識やマインドに関わる行動の基盤となる能力である。相手の共感や信頼を得られる能力であることが求められる
- ウ. ITCの有すべき実践力は、知識と実践知をもとに実務経験を積むことで実践知の強化が出来る
- エ. IT経営のためにITCに求められる「専門知」、「行動知」、「意識知」は「実践力」を付けるベースになるものである。

問題3. B社は業務プロセスの迅速化と経営活動の効率化のためにデジタル化プロジェクトを発足し、デジタル経営を推進するための実行計画書をITコーディネータのもとに作成し、ITベンダーから調達する案件も確定した。ここまでプロジェクトオーナーとして進めてきた経営トップはデジタル経営推進者にそのオーナーの権限を譲りプロジェクトオーナーを交代した。今後の進め方に、ITCとして以下の関わり方の中で適切と思われるものはどれか。

〈解答群〉

- ア. IT資源の調達まで完了したのであるから、開発以降のフェーズはITベンダーのプロジェクトリーダーによる指導に委ねることを勧める。
- イ. プロジェクトの一貫性のために、今までどおり経営者のアドバイザーとしてプロジェクト完了まで全うする。
- ウ. プロジェクトオーナーは交代するが、今までどおり経営者とデジタル経営推進者のアドバイザーをプロジェクト完了まで勤める。
- エ. 今後の作業はシステムの実態の構築・運用作業になるため、経営者のアドバイザーからデジタル経営推進者のアドバイザーとしてプロジェクトの完了まで続ける。

第1部 「デジタル経営について」 問題

問題1. PGL4.0はデジタル経営を「デジタル社会における経営環境の変化を洞察し、戦略に基づいたデータとITの利活用による経営の変革により、企業の健全で持続的な成長を導く経営手法」と定義した。この趣旨に沿わない不適切な説明は次のどれか

〈解答群〉

- ア. Volatility(変動性)・Uncertainty(不確実性)・Complexity(複雑性)・Ambiguity(曖昧性)の頭文字を取ったVUCA な時代と言われるほど変化が激しく、頻繁に事業の軌道修正が迫られる。
- イ. デジタル社会の定義は大量の情報(ビッグデータ)を活用することにより、創造的で活力ある発展が可能となる社会である。
- ウ. デジタル経営は、あるべき姿を描いて、仮説検証を繰り返しながらデータとITを徹底的に利活用して実現していくものである
- エ. デジタル経営は、クラウドシステムを用いて、現行のレガシーシステムからの脱却を図ることである。

問題2. デジタル経営が目標とする価値創造として捉えている適切な価値構造の説明は次のどれか

〈解答群〉

- ア. 価値創造は「企業価値」を決め、その下に複数の事業の「事業価値」を設定し、「事業価値」の達成を目指す。「事業価値」の達成に向けて「顧客価値」と「社会価値」の目標を決め価値創造を行う。
- イ. 「顧客価値」を創造することで市場の競争力を高め、「事業価値」を向上させる。複数の事業価値を高めることで「企業価値」の向上につながる。社会課題への貢献である「社会価値」は他のすべて価値創造に影響を与える。
- ウ. 価値創造は戦略であるから複数の事業に「事業価値」を設定し、「企業価値」としてまとめる。「事業価値」に基づいて「顧客価値」を決め、「企業価値」に基づいて「社会価値」の目標を決め価値創造を行う。
- エ. 「顧客価値」を創造することで市場の競争力を高め、「社会価値」を向上させる。「社会価値」を向上させることで「事業価値」を高め、「企業価値」の向上につながる。

問題3. 企業文化形成の位置付けに関し、適切と思われるものはどれか。

〈解答群〉

- ア. 経営理念に向けて「如何に行動するか」の行動理念が策定され、具体的な行動指針を作り、経営者の説明と動機づけによってエンゲージメントが醸成され企業文化が形成される。
- イ. 企業文化は、経営理念の下で、ESGとSDGsの社会全体の動きの中で経営ビジョンの一貫として策定する。
- ウ. 企業文化は、社員に向けた指針であるから、事業ビジョン達成に向けた指針として策定される。事業ビジョンは事業目標達成であるからエンゲージメント達成を目標し、事業目標達成に貢献する。
- エ. 経営理念に向けて「如何に行動するか」の行動理念が策定され、事業部単位で具体的な行動指針を作り、エンゲージメント向上を図っていく。

問題4. デジタル経営を支える人材として、不適切と思われる記述はどれか。

〈解答群〉

- ア. デジタル経営推進者は、リーダーシップを発揮してデジタル経営の方向性や目標を示し、ステークホルダー(従業員、取引先、株主等)に経営の変革実行に向けた動機づけを行う。
- イ. 開発リーダーの役割は、価値を生み出す仕組みを作ることにある。そのために、デジタル経営推進者との密接な協力関係のもと、ITシステムが最終的に生み出す事業価値をしっかりと認識する。
- ウ. 運用リーダーの役割は、価値を安定的に生み出すことにある。そのために、運用リーダーは社内から擁立することを検討する。
- エ. デジタル経営支援者の役割は、デジタル経営について熟知し、外部の専門家としてデジタル経営支援者となり助言や支援を行うことである。

問題5. デジタル経営を支える人材の役割で「主担当」として適切と思われる記述はどれか。

〈解答群〉

- ア. デジタル経営戦略プロセス(P2)は、経営者とデジタル経営推進者によって「主担当」を担う。
- イ. デジタル経営実行計画プロセス(P3)は。経営者とデジタル経営推進者によって「主担当」を担う。
- ウ. セキュリティ(CB-4)は、デジタル経営推進者、開発リーダー、運用リーダーで「主担当」を担う。
- エ. 提供価値検証プロセス(P6)は、デジタル経営推進者、開発リーダー、運用リーダーで「主担当」を担う。

問題6. デジタル経営を進めるプロジェクトの中で、PGL4.0で説く「実行基準」と「判断基準」考え方について議論になった。以下の意見の中で不適切と思われる意見はどれか。

〈解答群〉

- ア. 実行基準は、デジタル経営で注力すべき重要な活動領域での「進め方(プロセス)」を表すものであり、判断基準は、各プロセスの実行における判断の視点としての「基本原則」である。
- イ. 実行基準はデジタル経営プロセス(C1,C2)とCBデジタル経営共通基盤の進め方(プロセス)に適用するが、判断基準も等しくすべてのプロセスに適用するものである。
- ウ. 実行基準はデジタル経営プロセス(C1,C2)とCBデジタル経営共通基盤の進め方(プロセス)に適用するが、判断基準は両プロセスの横断の共通プロセスであるCBデジタル経営共通基盤に適用することになる。
- エ. デジタル経営の実現はデジタル経営プロセスの構築を前提にしています。このプロセスはデジタル経営推進の羅針盤であるデジタル経営の「実行基準」と「判断基準」の下に構築するものである。

問題7. 宅配業者のB社は、デジタル経営の手法を用いて業務改革プロジェクトが完了し、価値提供結果の報告書を提出した。現場からの安堵感が伝わってくる状況にある。

デジタル経営推進チームは今後の業務プロセスの改善・改革に対する対応に関する意見をまとめ、アドバイスを求めてきた。デジタル経営支援者としてアドバイスするより適切と思われる意見はどれか。

〈解答群〉

- ア. 業務プロセス改革が一段落したのであるから、従業員が業務に慣れ定常化することに全力を尽くす。
- イ. 業務プロセスの改善・改革は、経営戦略そのものであるから、経営者の指示が徹底できるようにする
- ウ. 業務プロセスの改善・改革は、デジタル経営推進が中心になって業務プロセスの生産性を向上させるような管理サイクルを作る。
- エ. 業務プロセスの改善・改革は、従業員が自律的な顧客価値創造ができるような風土が出来上がるまで繰り返し実践する。

問題8. デジタル経営プロセスの関係性について、以下の意見の中で不適切と思われる記述はどれか。

〈解答群〉

- ア. デジタル経営成長サイクル(C1)は、変革・成長プロセス(P1)とデジタル経営戦略プロセス(P2)からなり、価値実現サイクル(C2)とはデジタル経営実行計画プロセス(P3)を通して連携するサイクルである。
- イ. デジタル経営プロセスは、デジタル経営成長サイクル(C1)、価値実現サイクル(C2)、デジタル経営共通基盤(CB)からなるプロセスであり、デジタル経営共通基盤(CB)は両サイクルとは独立した監視プロセスである。
- ウ. デジタル経営プロセスは、デジタル経営成長サイクル(C1)、価値実現サイクル(C2)、デジタル経営共通基盤(CB)からなるプロセスであり、相互に強い関係をもつ実践プロセスである。
- エ. デジタル経営成長サイクル(C1)と価値実現サイクル(C2)は、経営方針の決定とそれに基づく実行という順序性の関係を有する。価値実現サイクル(C2)は企業による価値の実現であるから常に実施されるBizDevOpsのサイクルである。

問題9. デジタル経営の両サイクルにおけるプロセスの機能について、以下の記述の中で適切と思われるものはどれか。

〈解答群〉

- ア. 「C1デジタル経営成長サイクル」は、変革構想書とデジタル経営成熟度目標を設定し、経営戦略を策定して「C2価値実現サイクル」の実行サイクルへ伝達する。
- イ. 「C2価値実現サイクル」は、「P6提供価値検証プロセス」の機能を設け、目的である BizDevOpsにより、「C1デジタル経営成長サイクル」へのフィードバックループを設定している。
- ウ. 「C2価値実現サイクル」は、「C1デジタル経営成長サイクル」からの経営戦略を受けて、中期経営計画を策定し、「C2価値実現サイクル」の実行サイクルを実行する。
- エ. 「C2価値実現サイクル」は、「P6提供価値検証プロセス」の機能を設け、当サイクルの目的である BizDevOpsのプロセスによるフィードバックループを設定している。

問題10. デジタル経営成熟度の定義のなかで、「デジタル経営ガバナンス」と思われる記述はどれか。

〈解答群〉

- ア. 事業範囲の拡大、業務改革による生産性や事業スピードの向上等に、データとITを徹底的に利活用しているかを評価する。
- イ. 「経営者と従業員が一体となって経営の変革を進める企業風土が醸成されているか」、「組織学習やチームコミュニケーションを経営に活用できているか」を評価する。
- ウ. サイクルマネジメント(CB-1) 及びモニタリング & コントロール(CB-3) アクティビティによって、デジタル経営実現に向けてデジタル経営の2つのサイクルが適切に運用されているかを評価する。
- エ. システムを安定的に稼働させるための仕組みを整備し、それらを遂行する能力を評価する。

問題11. デジタル経営を成功に導く基本原則の中で、「顧客価値創造の原則」と思われる記述はどれか。

〈解答群〉

- ア. 自社のビジョンやパーパス(存在価値:理念)から顧客価値を発想し、実現すべき具体的な価値とその実現方法を設計する。顧客価値をイノベーションや業務改革の核に据える。
- イ. リーダーは、明確なメッセージを利用者に発することで理解と共感を高め、良好なユーザーエクスペリエンス(体験の質)を提供し続け、ユーザーの参画意識を高めることである。
- ウ. サイクルマネジメント(CB-1) 及びモニタリング & コントロール(CB-3)戦略と実現された価値が遊離しないよう経営戦略に沿った価値実現が目標通りに進んでいることをモニターし、タイムリーに可視化し関係者に伝える。
- エ. 仕事のあらゆる場面でデータ収集、可視化、正しい評価することを意識する。デジタルをフルに利活用し、データを重視した判断をする体制に変える必要がある。事業の成果(顧客価値)やリスクを可視化することは正しい判断につながる。

問題12. デジタル経営の基本原則に、「原則7:利用者動機付けの原則」がある。利用者との関係をより深めることの重要性を説いているのだが、その方法としての記述で不適切と思われるものはどれか。

〈解答群〉

- ア. リーダーは、動機づけのために明確なメッセージを利用者に発することで理解と共感を高める。
- イ. 利用者の協力レベルは理解と共感の深さで決まる。つまり、利用者からの多くのフィードバックはシステムの納期と完成度を左右するのである。
- ウ. 良好なユーザーエクスペリエンス(体験の質)を提供し続け、ユーザーの参画意識を高めることである。
- エ. オープンな企業風土や外部との共創体制づくり、組織学習、リスキリングプログラム等を積極的に採り入れる。

問題13. デジタル経営成熟度は、「デジタル経営成長サイクル(C1)と価値実現サイクル(C2)の2つのサイクルを有機的に実行していくことでデジタル経営を向上させる」と言われる。その理由として、以下の記述の中で不適切と思われるものはどれか。

〈解答群〉

- ア. 経営者がリーダーシップを発揮し、デジタル経営に対応できる組織文化を作ることによって、デジタル経営マインドを向上させる。
- イ. 経営者がデジタル経営マインドを向上させることでIT投資は膨らむが、IT化によるコスト削減(人件費等)が図れることで事業価値が向上する。
- ウ. デジタル経営の目標や戦略を明確に設定することは、組織やビジネスモデルの変革を実行・評価・改善するためのデジタル経営ガバナンスを向上させていくことになる。
- エ. 戦略に基づいてデジタル環境の向上を図ると同時に、日頃の業務遂行や自らの活動状況を評価・改善するプロセスを通して、デジタル利活用も向上させていく

問題14. デジタル経営推進者のミッションは、デジタル経営を推進し、実現させるキーパーソンである。以下の記述の中でその勝層に適切と思われるものはどれか。

〈解答群〉

- ア. 経営者とともに社内外のステークホルダーにデジタル経営の方向性や活動の内容を伝え、協力を得る活動を行う。
- イ. ITシステムの開発は外部企業の支援を受けても、運用リーダーを社内から擁立することを検討する。
- ウ. ステークホルダーが「自分ごと」としてデジタル経営に参画・協力するようにリードする。
- エ. 特に競争力を生み出すような分野においては開発リーダーを社内から擁立し、内製化することを検討する。

問題15. 中堅サービス業B社では、経営環境の変化スピードが企業の生死を制する中で、デジタル経営による経営スピード化の重要性を認識した。「デジタル経営サイクルの特徴は何か」の議論になった。
このサイクルの特徴を表していない不適切な意見は以下のどれか。

〈解答群〉

- ア. デジタル経営サイクルは、2つのサイクルから構成され、経営戦略沿ったプロセスを作り、両サイクルで連携して評価・改善するサイクルである。
- イ. デジタル経営サイクルは、計画と実行のスピードをスピードアップすることにあるから、計画情報と実行情報のIT化を図り差異分析の迅速化を図る。
- ウ. デジタル経営サイクルは、仮説検証によって快適環境をより正確に把握し、経営戦略に活かす仕組みで判断を迅速化する。
- エ. 経営戦略に沿って、IT資源を調達する際にPoC(Proof of Concept)により、より要求に整合した調達を可能にする。

「全体共通」 問題解答

問題1の答え: イ

解説: デジタル経営の実現には、経営者、デジタル経営推進者、IT経営支援者の3者が関わる。経営者を中心に、経営者にIT経営実現の推進を委託されたデジタル経営推進者が主体であり、ITCはデジタル経営支援者として両者に対して助言・支援を行うことが基本になる。

他の解答は不適切。

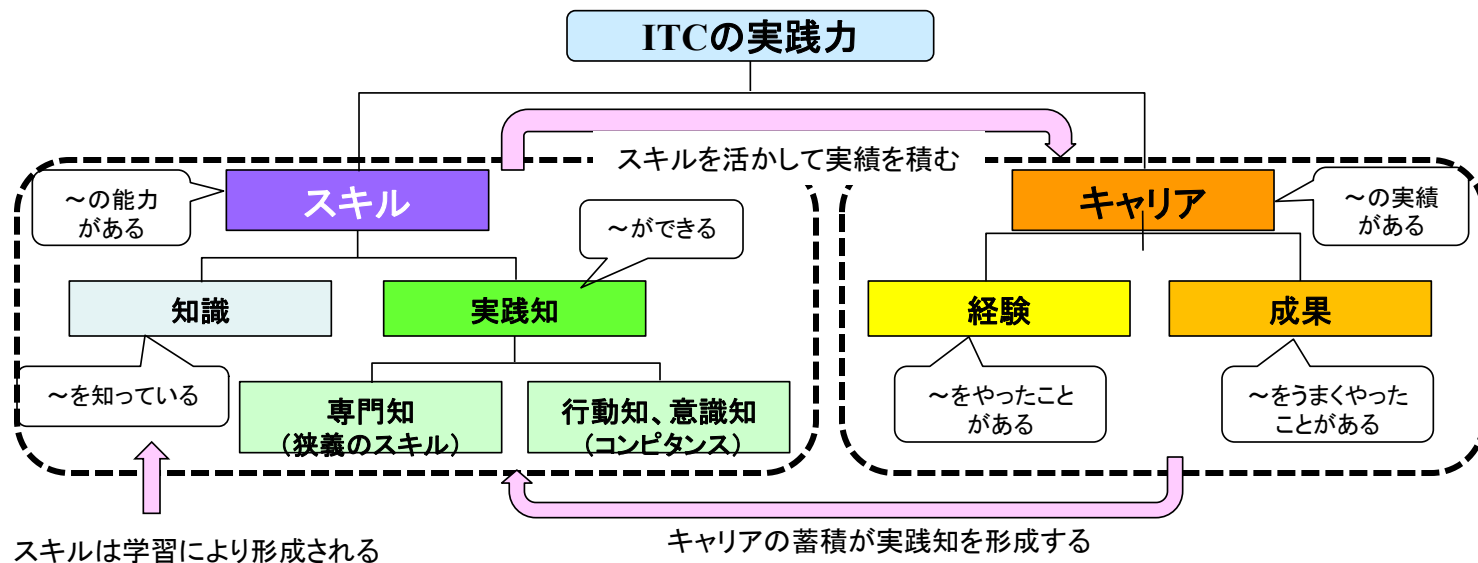
解答「ア」は、ITCはデジタル経営支援者として助言・支援であり、実践はないので不適切。

解答(ウ)は、デジタル経営を推進するのは、経営者とデジタル経営推進者であるので不適切。

解答「エ」は、デジタル経営のプロジェクトリーダーではなく、デジタル経営支援者なので不適切。

問題2の答え: イ

解説:ITCの実践力は、意識やマインドに関わる行動の基盤となる能力だけではない実践の能力である。広義のスキルとキャリアで構成される。広義のスキルは「知識」と知識を活かした「実践知」で構成する。広義の「スキル」は学習する「知識」とキャリア(実践)を通して得られる個人毎の能力(知識を活かす術)である実践知によって構成される。



出典:ITCプロセスガイドライン Ver.2.0

問題3の答え： ウ

解説：ITCのミッションは経営者、デジタル経営推進者に対するデジタル経営の実現に向けたアドバイザーであり、価値実現サイクル(C2)の各プロセスにおいてもすべてのプロセスにわたって適切なアドバイスを行い、デジタル経営の実現に向けて、目標達成を目指し、助言や支援することで社内人材を育成することにある。したがって、プロジェクト途中での交代は無いし、支援対象が変わることもない。

PGL4.0の「デジタル経営支援者」の解説に従い判断する。

その他の解答は不適切。ちなみに、

解答「ア」は、デジタル経営支援者としては実現までが基本である。

解答「イ」は、デジタル経営推進者への支援が抜けている。

解答「エ」は、デジタル経営サイクルは両輪で同時にプロセスが関連して活動している。経営者、デジタル経営推進者への両方の支援になる。

第1部 「デジタル経営について」 問題

問題1の答え： エ

解説:DX(Digital Transformation)を推奨するデジタル庁のDXの定義であり、

IT化の内容である。デジタル経営の定義である環境(VUCA)、ビッグデータ、仮説検証への帰着が無いので、解答「エ」は不適切。「デジタル経営」の定義に沿って解答する。

その他の解答ははデジタル経営の解説であり適切である。

解答(ア)は、デジタル社会の環境の変化の説明。解答(イ)は、デジタル経営の戦略に基づいたデータとITの利活用の説明。解答「ウ」は、デジタル社会でデジタル経営を持続的な成長をして進めていくための処方箋の記述。

問題2の答え： イ

解説:デジタル経営の価値創造は顧客価値の創造が原点であることから、解

答「イ」が適切。その他の解答は価値創造の順序が異なり不適切である。

解答(ア)は、企業価値からのトップダウンはデジタル経営の論理に反する。

解答(ウ)は、事業の戦略目標がトップにありデジタル経営の論理に反する。

解答「エ」は、顧客価値を高めることは事業価値としての市場競争力を高めるのであり、「社会価値」ではない。デジタル経営の論理に反する。

問題3の答え： ア

解説：企業文化は企業理念に対する「行動指針」から形成される。エンゲージメント(共感・貢献意識)を高めるにはトップのモチベーションが前提にあることから、解答「エ」が適切。

「デジタル経営を支える経営理念/企業文化」の記述に沿って解答する。

解答「イ」は、経営ビジョンの一貫ではなく企業理念に基づく。

解答「ウ」は、事業ビジョン達成目標としてエンゲージメント目標は設定しない。企業理念に基づいて設定する。

解答「エ」は、企業文化は全社活動であり、事業部単位の活動ではない。

問題4の答え： ア

解説：「ア」の記述は、経営者の役割記述であり、デジタル経営推進者の役割ではないので不適切。

「デジタル経営を支える人材と役割」の記述に沿って解答する。

他の解答は各担当者の役割記述になっていて適切である。

問題5の答え： エ

解説：デジタル経営での登場人物の「主担当」の役割は「◎」で表記されている(図表1.3.2)。解答「エ」のみが適切。

「デジタル経営を支える人材と役割」の記述に沿って解答する。

その他の解答は、主担当の補佐役まで加えられているので不適切。

図表1.3.2 登場人物の役割表

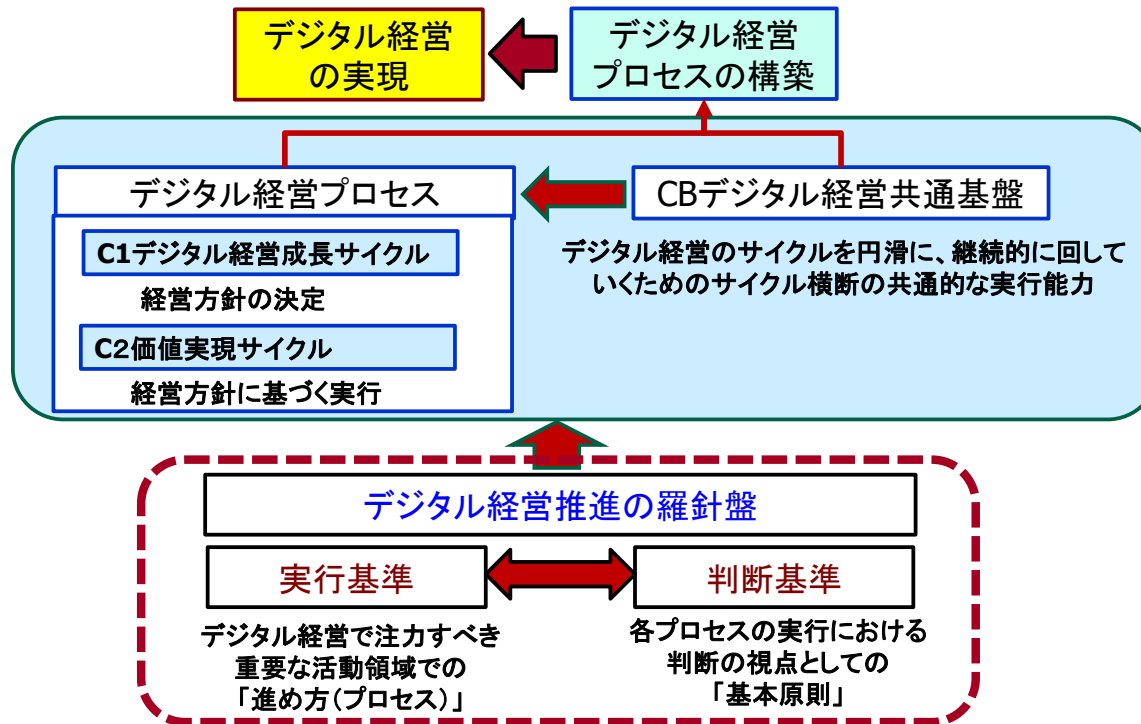
凡例：◎は主担当、○は主担当の補佐をする役割

		1. 経営者 (事業責任者)	2. デジタル 経営推進者	3. 開発 リーダー	4. 運用 リーダー
デジタル経営 成長サイクル (C1)	変革・成長プロセス(P1)	◎	○		
	デジタル経営戦略プロセス(P2)	◎	○		
価値実現 サイクル (C2)	デジタル経営実行計画プロセス(P3)		◎	○	○
	IT開発・導入プロセス(P4-)		◎	◎	
	価値提供・運用プロセス(P5)		◎		◎
	提供価値検証プロセス(P6)		◎	◎	◎
デジタル 経営共通基盤 (CB)	サイクルマネジメント(CB-1)		◎	○	○
	コミュニケーション(CB-2)		○	◎	◎
	モニタリング&コントロール(CB-3)		○	◎	◎
	セキュリティ(CB-4)		○	◎	◎
	組織学習(CB-5)	◎	○	○	○
		5. デジタル経営支援者			

問題6の答え： ウ

解説：デジタル経営の実現はデジタル経営プロセスの構築を前提にしています。このデジタル経営プロセスはデジタル経営推進の羅針盤であるデジタル経営の「実行基準」と「判断基準」の下に構築されます。したがって、「ウ」は不適切である。「デジタル経営の推進方法」に基づいて解答する。

その他の解答は、「実行基準」と「判断基準」の説明であり適切。



問題7の答え： エ

解説：業務改革プロジェクトは、デジタル経営の構築では部分最適でなく全体最適を追求すると同時に、顧客価値実現に向けてデジタル社会の変化に従業員自らが常に気づき、改善して行く風土になるまで繰り返し実施し作り上げることである。

デジタル経営の10の基本原則の基本原則3の「価値創造の原則（顧客価値を問い続ける）」に沿って解答する。

その他の解答、「ア」は業務が定常化した後なのに、定常化前の対処事項になっている。「イ」は経営者の徹底により、その指示の結果が業務提供報告書にすでに反映され官僚している。「ウ」は正解「エ」の次の改善活動になる。

問題8の答え: イ

解説: デジタル経営プロセスは、「C1デジタル経営成長サイクル」、「C2価値実現サイクル」、「CBデジタル経営共通基盤」からなる強い関係を持つプロセスである。「CBデジタル経営共通基盤」は、独立ではなく、ほとんどが両サイクル内で実践されるので、解答「イ」の記述は不適切。

「デジタル経営の推進方法」の「デジタル経営プロセスの全体像」に基づき解答する。

その他の解答は、全てデジタル経営プロセスの説明記述である。

問題9の答え: エ

解説: 「価値実現サイクル(C2)」は、BizDevOpsのプロセスによるフィードバックループを有し、顧客の課題を運用と開発が一体となって改善を図るサイクルになっていることから適切である。

「デジタル経営の推進方法」の「デジタル経営プロセスの全体像」に基づき解答する。

解答「ア」は、C1では経営戦略の策定後でなく中期経営計画までを作りC2へ伝達するので不適切。

解答「イ」は、「C1デジタル経営成長サイクル」へのフィードバックは「P3デジタル経営実行計画プロセス」によって行われるので不適切。

解答「ウ」は、中期経営計画を策定は「C1デジタル経営成長サイクル」で作成されるので不適切。

問題10の答え： ウ

解説：デジタル経営プロセスは、「C1デジタル経営成長サイクル」、「C2価値実現サイクル」で実行され、「CBデジタル経営共通基盤」のサイクルマネジメントとモニタリングコントロールアクティビティで方針が創られサイクル内で統治(ガバナンス)されるので、解答「ウ」が適切。

「デジタル経営の推進方法」の「デジタル成熟度」に基づき解答する。

解答「ア」は、「デジタルサービス利活用」の成熟度記述。解答「イ」は、「デジタル経営マインド」の成熟度記述。解答「エ」は、「デジタル環境」の成熟度記述である。

問題11の答え： ア

解説：価値創造の原則は、顧客価値を問い続けることにある。顧客価値をイノベーションや業務改革の核に据えることにあるから、解答「ア」が適切。「デジタル経営を成功に導く10の基本原則」に基づき解答する。

そのほかの解答は不適切。ちなみに、

解答「イ」は、利用者動機付けの原則(利用者との関係をより深める)。

解答「ウ」は、戦略実行整合の原則(戦略と実行を合わせる)。

解答「エ」は、ファクトベースの原則(データ重視の意思決定へ)。

問題12の答え: エ

解説: 解答「エ」は、利用者の個々人の動機づけではなく、事業組織の成熟度向上を図る「基本原則9: 学習と成長の原則」を述べている。当問題は個人の動機付けであるから、不適切。

PGL4.0の「デジタル経営について」の「基本原則7と9」の記述を基に解答する。

その他の解答は適切である。ちなみに、以下の順に対策をする。

解答「ア」は、「利用者への動機づけ」の記述。

解答「イ」は、「ユーザーフィードバックへの対応」の記述。

解答「ウ」は、「エクスペリアンス(良質な体験)」の記述。

問題13の答え: イ

解説: デジタル経営で、経営者がデジタル経営マインドを向上させることは企業のデジタル成熟度を向上させ、組織文化を構築するためにある。単に、IT化投資によるコスト削減で収益を上げるためではないので、解答「イ」は不適切。PGL4.0の「デジタル経営について」の「デジタル成熟度」の記述を基に解答する。

その他の解答は適切である。ちなみに、

解答「ア」は、「デジタル経営マインド」。

解答「ウ」は、「デジタル経営ガバナンス」。

解答「エ」は、「デジタル環境」と「デジタルサービス利活用」の成熟度記述である。

問題14の答え： ア

解説：デジタル経営推進者の基本的な役割は、デジタル経営を推進し、実現させることである。そのために、デジタル経営の進め方と基本原則を理解し、率先して実践することが求められ。経営者に対し提言することや、開発リーダーや運用リーダーと緊密な関係を構築する等、積極的な姿勢が必要になるので、解答「ア」は適切。PGL4.0の「デジタル経営について」の「登場人物と役割」の記述を基に解答する。

その他の解答は不適切である。ちなみに、、

解答「イ」は、運用リーダーの役割。

解答「ウ」は、経営者の役割。

解答「エ」は、開発リーダーの役割である。

問題15の答え： イ

解説：デジタル経営プロセスは、「C1デジタル経営成長サイクル」と「C2価値実現サイクル」を有機的に実行しデジタル経営を高めていく仕組みである。両サイクルの活動が連携され、評価・改善される仕組みである。そこに仮説検証やPoCも実装されている。単なるIT化とは異なるため、解答「イ」は不適切。

PGL4.0の「デジタル経営について」の「4-2 2つのサイクルと変革能力」を基に解答する。

その他の解答は適切である。解答「ア」は、「デジタルサービス利活用」の成熟度記述。解答「イ」は、「デジタル経営マインド」の成熟度記述。解答「エ」は、「デジタル環境」の成熟度記述である。

IV. 「ITコーディネータ試験想定問題カテゴリー」表

カテゴリー	問題NO	基本/応用問題	問題分野
全体共通	1	基本問題	ITCの役割
	2	基本問題	ITCの実践力
	3	応用問題	ITCミッション
第1部 第1章 デジタル経営	1	基本問題	デジタル経営の定義
	2	基本問題	価値構造
	3	基本問題	企業文化形成
	4	基本問題	デジタル経営の人材
	5	基本問題	登場人物の役割表
	6	応用問題	実行基準と判断基準
	7	応用問題	原則③顧客価値
	8	基本問題	デジタル経営プロセス
	9	基本問題	C1,C2経営 サイクル
	10	基本問題	デジタル成熟度
	11	基本問題	基本原則(価値創造の原則)
	12	基本問題	基本原則(利用者動機付け)
	13	基本問題	サイクルと成熟度
	14	基本問題	デジタル経営人材のミッション
	15	応用問題	デジタル経営構造
第2部 デジタル経営成長サイクル	1	基本問題	C1経営成長サイクル機能
	2	基本問題	C1プロセス連携機能
	3	基本問題	変革・成長経営者姿勢
	4	基本問題	P1-1とP1-2の位置づけ
	5	基本問題	変革構想書
	6	基本問題	デジタル経営成熟度項目
	7	基本問題	デジタル経営成熟度レベル
	8	基本問題	P2の位置づけ
	9	基本問題	デジタル経営戦略成果物
	10	基本問題	仮説検証
	11	基本問題	あるべき姿構築手順
	12	基本問題	デジタル経営戦略の留意点
	13	基本問題	KGIとKPI
	14	応用問題	ビジネスモデル
	15	応用問題	CSF
第3部 価値実現サイクル(C2) & デジタル経営実行計画(P3)	1	基本問題	C2価値実現サイクル
	2	基本問題	仮説検証の適用分野
	3	基本問題	登場人物と役割
	4	基本問題	プロセスの関係
	5	基本問題	P3経営実行計画の機能
	6	基本問題	タスク3データとIT調査
	7	基本問題	タスクの成果物
	8	応用問題	プロジェクト進捗KPI

カテゴリー	問題NO	基本/応用問題	問題分野	
IT開発導入	9	応用問題	業績管理	
	10	応用問題	経営者の参画意識	
	11	基本問題	プロセスの位置づけ	
	12	基本問題	IT開発の位置づけ(役割)	
	13	基本問題	IT開発とIT導入の役割	
	14	基本問題	IT開発の実施事項	
	15	基本問題	IT開発要件の実現	
	16	応用問題	移行と課題運用	
	17	基本問題	IT導入の位置づけ	
	18	基本問題	IT導入アクティビティ	
	19	基本問題	RFP記述	
	20	基本問題	IT導入導入・利活用開始(タスク2)	
	21	応用問題	要件定義	
	22	応用問題	IT投資予算	
	23	応用問題	ベンダー選定	
	価値提供・運用	24	基本問題	P5の位置づけ
		25	基本問題	P5-1の位置づけ
		26	基本問題	P5-2の位置づけ
		27	基本問題	P5-1とP5-2の役割の違い
		28	基本問題	価値提供開始の準備事項
		29	基本問題	ヘルプデスク
		30	基本問題	SLM
		31	基本問題	勝提供業務(P5-1 3)
32		基本問題	サービスレベル維持(P5-2 1)	
33		基本問題	ITサービス維持(P5-2 3)	
34		基本問題	システム監査(P5-2 4)	
35		応用問題	変更管理	
提供価値検証	36	基本問題	提供価値検証の位置づけ	
	37	基本問題	プロセスの主要機能	
	38	基本問題	検証プロセス	

カテゴリー	問題NO	基本/応用問題	問題分野
第4部 デジタル経営共通基盤(全体)	1	基本問題	CBの役割
	2	基本問題	CBの登場人物の役割
	3	基本問題	C2プロセスとCBの関係
サイクルマネジメント	4	基本問題	組織学習
	5	基本問題	サイクルマネジメントの位置づけ
	6	基本問題	サイクルマネジメントの範囲
	7	基本問題	サイクルマネジメント責任者
	8	基本問題	プログラムマネジメント
	9	応用問題	サイクルマネジメントの考え方
コミュニケーション	10	基本問題	コミュニケーションの位置づけ
	11	基本問題	コミュニケーション言葉定義
	12	基本問題	コミュニケーション計画
	13	基本問題	コミュニケーション計画プロセス
	14	基本問題	コミュニケーション4象限
	15	応用問題	コミュニケーションの欠如
モニタリング	16	基本問題	モニタリングの位置づけ
	17	基本問題	モニタリング役割
	18	基本問題	モニタリングのタイプ
	19	基本問題	モニタリング分析・評価
	20	応用問題	モニタリング体制
	21	応用問題	開発進捗管理
セキュリティ	22	基本問題	セキュリティの位置づけ
	23	基本問題	セキュリティの役割
	24	基本問題	セキュリティの共有
	25	基本問題	セキュリティの脅威脆弱性
	26	応用問題	セキュリティ対策
	組織学習	27	基本問題
28		基本問題	組織学習の成長サイクル
29		基本問題	組織学習の仕組み

問題数: 100問